

特集

あなたの臨床が変わる！? 対話型のアート鑑賞で伸びる観察力と診断力



市中病院で5年間内科中心に幅広く学んだ後、大学病院の総合診療科の立ち上げに関わる。現在、教育と診療の傍ら京都芸術大学大学院にバーチャル通学中。観察と対話に焦点を当てて医学教育に関わっていきたいと考えています。

今回の特集。2 ページでまとめると……

図1 この絵には何が描かれていますか？



(Winslow Homer, 1885)

「この絵には何が描かれていますか？」(図1)と聞かれたら、あなたはどのように説明しますか？ あなたの視線はどのように動きましたか？

一通りみたら、それでは次のような問いかけに答えてみましょう。

- ① この作品の中では何が起きているのでしょうか？
- ② この作品のどこからそういうふうと思ったのですか？
- ③ 他にもっと発見がありますか？

本稿では、1980年代にニューヨーク近代美術館で開発された世界的に有名なアート鑑賞教育プログラムであるヴィジュアル・シンキング・ストラテジー (visual thinking strategies: VTS) と国内で体験した「対話型鑑賞」の考え方をベースに、アート鑑賞を通じて患者さんに対しての観察力、診断力、共感力、コミュニケーション力などを鍛えるためにアレンジし、医学教育への活用の可能性を探っていきます。

- ・何が起きている
いますか？
- ・どこからそう
思いましたか？
- ・他に発見が
ありますか？

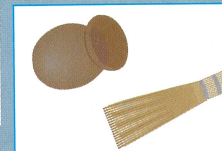
日本ではまだまだ知名度が低いですが、欧米では、このアート教育と医学教育を結びつけるという教育法を取り入れている医科大学は、ハーバード大学医学部をはじめとして、かなりの数に上ります。それらのメリットやカリキュラムをまとめたレビューも報告されています。何より、美しい芸術を楽しみながらトレーニングでき、また、患者さんが相手ではないためリスクなく繰り返し訓練できるところが臨床教育として優れている点です。

患者さんに対する観察力、診断力、共感力、コミュニケーション力などのスキルは、医学生だけでなく、卒業後も医師として鍛え続けていく必要があります。対話型のアート鑑賞はそのためにも非常に役立つものとなっています。

本稿でご紹介するのは次の通りです。

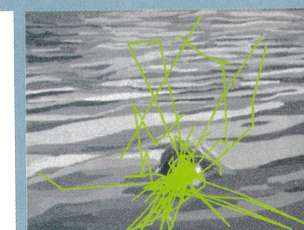
1 アートと医学の意外な関係

- (1) リベラルアーツと医学
- (2) アート鑑賞と医学教育



2 アート鑑賞の臨床への活かし方

- (3) アートを観察する力が臨床力アップにつながる
- (4) 臨床での観察力/診断力に活かす
- (5) 共感力を高め、患者に歩み寄る
- (6) 組織運営力を高める/燃え尽きないために
- (7) 豊かな文化的感受性を身につける



3 やってみよう！ 対話型アート鑑賞

- (8) 対話型アート鑑賞について
- (9) なぜ対話型か？ 一人では生まれないそのメリットは？
- (10) どこからそう思いましたか？ —ファシリテーション基本の「き」
- (11) 実践！ 対話型アート鑑賞の実際の進め方

1 リベラルアーツと医学

まず最初に、「対話型アート鑑賞」とは何か？ という説明をしましょう。

アート鑑賞をする際に、アートに関する知識（作品の名前や画家、技法、専門家の考えなど）にとらわれるのではなく、鑑賞者がアートを観たときの気づきや解釈、思いをもとにして、グループでディスカッションしながら行う鑑賞法です。時間をかけアートをじっくり観ると、自分で考えるという能力を磨くことにもなりますし、グループで対話することにより、自分とは違う他者の観点も学ぶこともできます。観察力や洞察力、言語化力やいざというときの判断力を育てたりすることもできるでしょう。

医学とアートという一見かけ離れた2つのジャンルですが、リベラルアーツという観点で考えると、密接とも言える関係がみえてきます。人間である患者さんの体と心を診察するには医学だけでなく、人間的な感性や知性などが必須となり、横断的な広く深い教養全般（リベラルアーツ）を学ぶことが必要になってくるためです。

リベラルアーツの語源はギリシア・ローマ時代の学ぶ必要のある自由七科（具体的には文法学、修辞学、論理学、算術、幾何学、天文学、音楽）に由来するとされます。絵画や彫刻などをはじめとした芸術全般もリベラルアーツとして分類されることが多いです。

リベラルアーツの位置づけとしては現在の大学の教養課程に属するような科目ということになりそうです。でもそれは、俗に言われているような「広く教養を深める」だけではなく、付け焼き刃にとどまらない価値のある領域と言えそうです。

瀬木比呂志氏は著書『リベラルアーツの学び方』¹⁾のはしがきで、リベラルアーツを「実践的な意味における生きた教養を身につけ、自分のものとして消化する、そして、それらを横断的に結びつけることによって広い視野や独自の視点を獲得する」ものと定義し、その意味では広く、前述のような科目に限らず各種の芸術までも含む、としています。

丸山真男氏が、『日本の思想』²⁾の中で、文化の型の分類を行っていますが、日本の教育体系は「ササラ型」と対極的な「たこつぼ型」ではないか、という評価をしています（図2）。日本のたこつぼ型は専門化は進むものの、「〇〇村」というような閉鎖的な世界が形成され、外からの声が届きにくくなります。その結果、外から評価するとありえないような古い倫理観、制度がまかり通ったりするのは実感するところではないでしょうか。

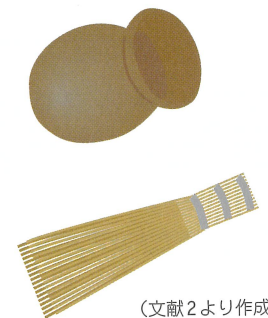
日本の知識偏重・暗記型の教育形態はそれらの文化的背景をモロに受けていそうです。学生時代、今教わっている教科・分野が将来どのように役に立つのかまで、言葉

◀「対話型アート鑑賞」とは、鑑賞者がアートを観たときの気づきや解釈、思いをもとにして、グループでディスカッションしながら行うアート鑑賞法

にしながら教えてもらえる機会はそう多くありませんでした。「学校で習った〇〇は現場ではまったく役に立たない」といった声がしょっちゅう聞かれるのも、そういうことなのでしょう。

図2 日本と欧米の文化型の分類

- たこつぼ型
 - ・専門が閉ざされており、相互の交流のない学問ないしは文化
 - ・日本
- ササラ型
 - ・専門に分かれているが、根の部分、底の部分は他の領域に繋がっている学問ないしは文化
 - ・欧米



（文献2より作成）

リベラルアーツは目新しそうな、頭が良さそうにみせるためのファッション的なものでも、自分の権威に箔を付けるための飾り物でもありません。学びかた次第で、世界を観て感じる力、考える力の双方を、ともに伸ばすために役立てることができるのです。そしてそれら本質を掴まんとする、自分で観て聞いて考える技術の習得には、“正解の解釈が存在しない”絵画や音楽などを含めた広い意味での“アート”は、題材としてもまた視点としても大変優れているのではないかと考えます。観察力のトレーニングに関しては言わずもがな、診断力のトレーニングとしても、むしろ医療を題材にするより効率よい相棒になってくれると言っても過言ではないかもしれません。

◀“正解の解釈が存在しない”絵画や音楽などを含めた広い意味での“アート”は、自分で観て聞いて考える技術の習得には大変優れている

2 アート鑑賞と医学教育

突然ですが、最近絵画を見る機会がありましたか？ あるとしたら美術館に足を運んだときの方も多いでしょう。その際に一番気に入った絵はどれくらいの時間をかけて観ましたか？

私たちが美術館で実際に作品を観ている時間を平均すると30秒にも満たないという研究結果³⁾があります。ただでさえ作品そのものを観る時間が少ないのですが、さらに輪をかけて作品に添えられた解説文などを読むのに時間は費やされます。

日本では前述のように知識偏重の教育が行われてきました。それは医学部でも例外ではなく（むしろ強く）膨大な専門的知識を溜め込む、考えるというよりも覚える能力が求められてきました。私たちがアート作品を鑑賞するときにも、そういった背景が

1) 瀬木比呂志：リベラルアーツの学び方。ディスカヴァー・トゥエンティワン、2015。

2) 丸山真男：日本の思想。岩波書店、1961。

3) Kaplan I: How Long Do You Need to Look at a Work of Art to Get It?, Artsy. 2017. [https://tinyurl.com/y6sqehgp]

反映されてしまっているように思えます。つまり、自分の感性を駆使して絵を鑑賞するのではなく、絵に関する知識を欲し“わかりたがる”のです。

医療は日進月歩で発達し、細分化や専門化はとどまるところを知りません。不安定な情勢や社会構造のこの時代、学生の頃に学んだことが、働く頃には一新されているということも少なくないでしょう。一方で、問いさえ立てれば、手元のPCやタブレット等で即座に最新の知見に到達することが可能になりました。私たちが扱う情報の量は比較にならないほど増加していています。大量の、しかも目まぐるしく変化する情報を手にしながら何を診療に適用し、何を使用しないのか。今後求められていくのは自分で考え、問いを立て決断していく能力なのではないのでしょうか？

物事を正解・不正解で考えがちな昨今ですが、逆にアート作品は本質的に正解の解釈がない、というのが最大の特徴とも言えます。それゆえに、時に言語力、コミュニケーション力など様々な生きるチカラを訓練する媒介にもなってくれると思います。また言葉なくとも温かく寄り添ってくれ、人生を豊かにしてくれる存在にもなってくれるかもしれません。

◀アート作品は本質的に正解の解釈がなく、それゆえに、時に言語力、コミュニケーション力など様々な生きるチカラを訓練する媒介にもなってくれる

3 アートを観察する力が臨床力アップにつながる

ビジネス界をはじめ各方面で“アート”が注目されています。その証拠に本屋に行けば、デザイン思考、アート思考、名画で学ぶなんたらなどなど、ひとつのコーナーができるほどです。

“医療はアートだ”とは、サー・ウィリアム・オスラー先生をはじめ、名だたる名医たちに昔から言われてきましたが、具体的に医療現場におけるアートとは何か、どのようにトレーニングしていけばいいのか、というのが言語化・体系化されてこなかった、二の足を踏んでいたのではないかと推測します。その証拠になるでしょうか、全国の大学医学部でアートを取り入れた授業をオープンに行っているところは、私が所属している獨協医科大学で開始するまでは皆無でした。

ただ海外はどうかというと、リベラルアーツとしてカリキュラムに取り入れている医科大学は、ハーバード大学医学部をはじめとして、特に欧米ではかなりの数に上り(表1)、それらのメリットやカリキュラムをまとめたレビューも報告されています。

アートを医学教育に取り入れて期待できる能力は表1⁴⁾のように5項目と言われています。一部項目ごとに観ていきましょう。

◀欧米ではリベラルアーツとしてアートをカリキュラムに取り入れている医科大学はかなりの数に上る

表1 医学教育での視覚芸術実施例、および向上が期待できる能力について

期待できる能力アップ	VTSプログラムを導入している医学大学
①臨床での観察力/診断力 clinical observation/diagnosis	Harvard Medical School UT Health Science Center, San Antonio UT Southwestern
②共感性 empathy	Baylor College of Medicine Perelman School of Medicine Rush Medical College University of Cincinnati
③組織運営力/ コミュニケーション力 team building/communication	Perelman School of Medicine Baylor College of Medicine Columbia University Vagelos College of Physicians and Surgeons, Weill Cornell Medical College
④レジリエンス、燃え尽き防止 promoting wellness/preventing burnout	University of Buffalo Rush Medical College UT Southwestern
⑤文化的感受性 cultural sensitivity	Icahn School of Medicine University of Cincinnati

(文献4より作成)

4 臨床での観察力/診断力に活かす

では具体的にアート鑑賞をどのように臨床教育に活かすのでしょうか？ まず最初には、臨床での観察力/診断力に活かすことについて考えてみましょう。

人は何かを見るときに漠然と見てしまっています。そして漠然と見たとき、思いのほか見ている範囲自体が狭く、情報を読み落としてしまっているものです。

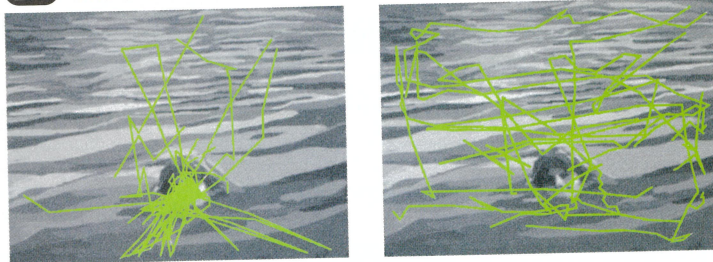
これは実際に研究でも証明されています。アイトラッカーという、眼球の動きを計測し視線の場所や移動を可視化する装置を用いた研究をみてみましょう(図3)⁵⁾。何かしらの専門的な美術教育を受けた学生群と、特別な美術教育を受けていない一般学生群とにわけ、1枚の写真を見てもらい、アイトラッカーで視線の動きを計測しました。美術教育を受けた学生たちと普通の学生たちとの間で、視線の動きはどのような違いが出ているのでしょうか。

黄緑色の線が視線の動きです。写真自体が、女性(?)が水面からニョキッと顔半分だけのぞかせているインパクトが強い写真なこともありますが、左の写真の一般学生群では女性の顔に視線が集中し、他の部分(特に左右サイド)にほとんど視線が動いていないのがわかります。一方、右の写真の美術教育を受けた群では女性の顔も見つても、上下左右まんべんなく視線を動かしているのがわかるでしょう。

5) Vogt S, et al: Perception. 2007;36(1):91-100.

4) Mukunda N: Med Educ Online. 2019;24(1):1558657.

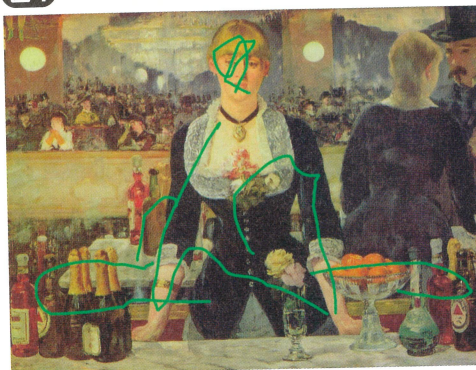
図3 視線軌跡の比較



左：一般学生群，
右：専門的な美術教育を受けた群
(文献5より作成)

次に画家マネの描いた絵画作品を観てみましょう(図4)。

図4



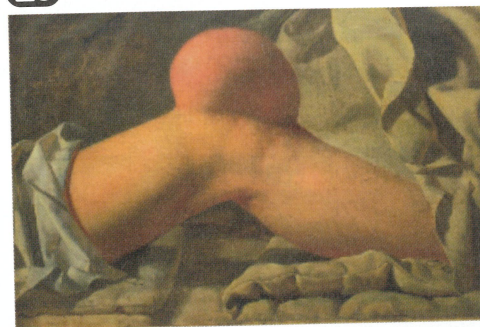
(Édouard Manet, 1882)

好きなように観ていいですよ、と言われたら、あなたの視線はどのように動くでしょうか。おそらく真ん中の女性をつぶさに見た後は、手前の酒瓶に視線が移動していくのではないのでしょうか(参考用に私が最初に見た際の視線の動きを緑の線で表します)。

最初の段階から左上角にあるサーカスであろう女性の足に気づく人はほとんどいないと思います(大型の美術書やインターネット等だと確認しやすいかもしれません)。

ただ、もしも「この絵の時代背景や国、状況を推測する」という課題が生まれたとき、自分の読み取れる情報が、単なる「バーの絵」という情報のみなのか、または「サーカスも鑑賞できるような広いホールの中にあるバーの絵」という具体的な情報まで読み取れるのかによって、その問いに挑むために必要な情報量の差としては非常に大きなものになるのではないのでしょうか。さらにもう一枚観てみましょう(図5)。

図5



(Wilhelm Ferdinand Bendz, 1829)

この絵に何が描いてあるか、説明してください、と言うと、学生さんの多くは「足が腫れています」と表現します。

はたして適切な表現でしょうか？ もしくは読み取れる情報はすべてでしょうか？ この絵をじっくり眺めてみましょう。

向かって左側に大腿部、右側にすね・ふくらはぎがある様子から、人間の下肢の側面からの像が描かれていることは容易に推測できます。筋肉の張り方をみると右足でしょうか。反対側の足は描かれていません。

すぐに目が向かうのは、膝の前面が腫大していることでしょうか。非常に大きく10~15cmくらい上に凸に腫大しています。腫大した部位に一致して皮膚色は均一に赤みを帯びています。膝関節は進展しきっておらず40度ほど屈曲しています。腫れの範囲は膝の前側のみに限られていて、側面や膝の背面には至っておらず赤みもありません……。

・赤く腫大している(炎症の徴候)

・膝の全周ではなく、前面のみに限局した腫脹

絵の細部までの情報を的確に拾い上げられれば、それらを元に「膝蓋前滑液包炎」という診断名は鑑別に挙げられるようになるはずです。

私の知る限り、国内の医学部カリキュラムで、対象物に対する視線の動かし方に焦点をあてた臨床観察力や診断力をトレーニングするプログラムはみたことがありません。一方でおそらく他の領域にも言えることだと思いますが、熟練者と呼ばれる人たちは対象物に対する視線の動かし方が優れており、文字通り「世界の見方」が違います。この事実を知ることだけでも大きな前進だと思います(少なくとも私にとってはそうでした)。それがアートを用いることで患者さんに負担をかけるというリスクもなく、反復して訓練できるとすれば、こんなに良いことはないのではないのでしょうか。

医療におけるスタートラインは病歴聴取(対話)と診察から、という大原則はもはや揺るぎようがないことだと思います。絵画を用いたトレーニングを行うと、自分の患者観察経験を振り返り、その重要性や唯一性を必然的に再認識することになります。

患者さんを「時間をかけて診る」、もしくは「一点にとらわれず俯瞰的に診る」など、言語化すれば当たり前のようなことを「知る」のではなく、文字通り「体得」するため、絵画を用いたトレーニングによって得た観察力は自分の診療道具として活用していくことができます。それはすなわち診断をはじめとした患者診療を行っていくための「判断材料(しかも最も価値の高い一次情報)が増えていく」ことになりますので、医師としての臨床力が高まるということも容易に理解できる話です。

◀熟練者と呼ばれる人たちは対象物に対する視線の動かし方が優れており、文字通り「世界の見方」が違う

◀絵画を用いたトレーニングによって患者診療を行っていくための判断材料が増えていく

実際に私が数コマにわたって絵画を用いたトレーニングを行った学生の発言をみても、明らかに各々が得る視覚情報は増加しているにもかかわらず、情報の多さに困惑したり途方に暮れたりすることはなく、むしろ統合的な判断を下す能力が向上していく印象があります。

ふとした患者さんの仕草や表情の変化、ベッドサイドにある小物、髪や皮膚の変化など、絶対に検査等では得られない判断材料は、患者さん自身や周辺にたくさんあります（しかも短時間で情報を得ることが可能です）。そういったものへの洞察力は単なる身体に対する診断力に限らず、病める心を汲み取る力にまでつながり、善き診療へとつながっていかないはずがないと思います。

5 共感力を高め、患者に歩み寄る

アート作品をグループでディスカッションを行いながら鑑賞していくことで、他者の解釈や感じ方に触れることができます。

「患者さんへの共感が大事」、これもよく医療者への教育で言われることですが、個人的には懐疑的です。そんな簡単に共感なんてできてたまるか、とも思いますし、無思考的に「かわいそう」「辛そう」などと哀れんだりするのは逆に患者さんを傷つけることにもなるのでは、と思います。必要なのは目の前にいる相手の患者さんをよく見て、よく話して、個人個人によって違っている、いろいろな考え方があるということを体感することなのではないでしょうか。

授業でこの写真（図6）を見せると様々な解釈が学生たちから飛び出します。

しばらくするとこの男性がパンツ一丁であること、両手を持ち上げていること、また周囲の状況などから年齢や人種、シチュエーションを皆は想像しはじめます（図7）。

図6



© 2014 Tony Matelli

図7



© 2014 Tony Matelli

学生から出た意見

- ・金曜夜の俺
- ・インスタ映え
- ・ギャンブル（飲みすぎ）注意のシンボル
- ・ゾンビ

実はなんと、この男性は生身の人間ではなく、非常に精巧に作成された銅像だったのです。あまりにもリアルに造られているせいか、初見から気づく人はほとんどいません。

この作品は当初アメリカの女子大学のキャンパスに唐突に設置され、学生からは「怖い」「性犯罪を彷彿とさせる」など非難轟々でした。一方ゾンビ映画好きには好まれたり、SNSでは様々な説も飛び交い、一時は話題になったようです。

タイトルはSleepwalker（夢遊病者、Tony Matelli作）だったのですが、私たちの常識や既成概念にちょっかいを与えるかのごとく設置されたこのアート作品により、どこまでが計算されたものかはわかりませんが、まったく同じ銅像を観ているにもかかわらず、観る人によって解釈や引き起こされた感情が非常に多彩である、ということが浮き彫りにもなりました。

他人が世界をどのように観ているか、その視点や元になる価値観に触れることは日常生活を送っているだけでは非常に難しいことです。ただ一度アート作品が他人と自分の間に入れば、鑑賞者を投影した解釈が浮き彫りになり、またそれを共有し合うことができやすくなるのです。

このように、アート作品を媒介として、他人と対話を重ね、感じ方や価値観が個々によって違ってくることを体感することで、患者さんへの共感力、コミュニケーション力のトレーニングにつながっていくと思います。

◀アート作品を媒介として、他人と対話を重ね、感じ方や価値観が個々によって違ってくることを体感することで、患者さんへの共感力、コミュニケーション力のトレーニングにつながっていく

6 組織運営力を高める／燃え尽きないために

前述のように、価値観や視点の違いを言葉や知識だけで知っている人と、その多様性を肌で体感できている人の差は大きく、他者との違いを体感できている人は、それだけで異なる価値観への適応や他者との連携でアドバンテージがあると容易に想像できます。自分すらも冷静に、俯瞰視することも可能になり、「自分の考えが正しい」、「自分の考えがすべて」といった極端な判断に偏りづらくなります。自分と違う意見をもった人に対してもうまく適応し協力し合えるようになります。

また、もうひとつ大きな意味があります。それはストレスを癒し、気持ちをリフレッシュしてくれる、という点です。

◀他者との違いを体感できている人は、自分と違う意見をもった人に対してもうまく適応し協力し合えるようになる

現代社会はVUCA時代と言われます。VUCAとは、Volatility (変動性・不安定さ)、Uncertainty (不確実性・不確定さ)、Complexity (複雑性)、Ambiguity (曖昧性・不明確さ) という4つのキーワードの頭文字から取った言葉で、あらゆる環境が目まぐるしく変化し、予測できない状態を示しています。私たちはVUCA時代に適応し、これまでの時代とは比較にならないほどの情報の海を泳いで行かねばなりません。そんな中“マインドフルネス”が注目されています。

マインドフルネスのエッセンスは瞑想や禅、その他の訓練を通して「今、この瞬間の体験に意図的に意識を向け、評価をせずに、とらわれない状態で、ただ観ること」と言われています。対話型アート鑑賞でも初めてみる作品に対する自分の気づきや考えに価値をおきます。五感を開放し、自分の感覚を尊重し、施行後には心地よい疲労感が生まれます。また絵を介して自分のコンディションを測るパラメーターにもなるでしょう。

コロナ下で医療従事者もいまだかつてない、足元を揺るがすようなストレスに晒されていますが、私も日々めまぐるしく変化する情報に翻弄されながらも、こういった形で定期的に少しでも感覚と向き合う時間をつくることで自分を客観視し、気分をリフレッシュできているような気がしています。

7 豊かな文化的感受性を身につける

文化的感受性 (cultural sensitivity) とは、あまり聞き慣れない言葉ですが、相手を支配したい・思い通りにしたいという独占的な欲求ではなく、自分が持つナラティブ (背景、文化) と他人の間にある差異を知覚・認識することのできる感性、また理解し尊重しようという姿勢や能力を指すようにとらえています。

対話型のアート鑑賞を行うと、同じ事象からでも人によって正解や不正解などの範疇を超えて、まったく異なる解釈が生まれることを体験することができます。一人の患者さんの診療方針等に対して、職種内でも多職種間でも意見対立というのは (小さいものも含めれば) しょっちゅう起こるものだと思いますが、前述のようなことを理解しておけば変に悲劇的になったり、また自分と違う意見を持った人に対して拒否的に振る舞うなんていうこともなくなるはずです。

我々のからだは自分で心身ともに健全に保たなければなりません。美術鑑賞は各々の心身、特に「心」にどのような利点があるのでしょうか。

今現在、高齢化は世界的に進んでおり、リンダ・グラットン著の『LIFE SHIFT』⁶⁾ という本も脚光を浴びました。寿命には平均寿命のほか、健康寿命があり、医療においても疾患の治療や予防だけでなく、フィジカルとメンタルの両面にわたって自身の

6) リンダ・グラットン、他：LIFE SHIFT. 池村千秋、訳、東洋経済新報社、2016。

◀文化的感受性とは自分が持つナラティブ (背景、文化) と他人の間にある差異を知覚・認識することのできる感性、また理解し尊重しようという姿勢や能力を指す

健康を維持する働きかけがますます必要になってきます。

『脳は美をどう感じるか』⁷⁾ を著した慶應義塾大学文学部人文社会学科教授の川畑秀明氏は「芸術に美を感じる事が私達の生活に役立つと言えるのではないかと提言しています。

川畑氏の研究⁸⁾によれば、美術や音楽など美しさを鑑賞するときに眼窩前頭皮質の活動が高まり、また逆に醜さを感じる時には運動を司る前頭葉にある領域の活動が高まる事が示されました。私たちの脳は日常的に観たり、聞いたり、味わったりする行為を繰り返して対象物に対する評価を与え、幸せ、楽しいなどのポジティブな感情や、辛い、悲しい、怒りなどのネガティブな感情を抱きます。

現代社会で、私たちが目にするもの、耳にするものは既に誰かの解釈や意見、感情の情報が付随してしまっていることがほとんどです。有形・無形に限らず、他ならぬ自分自身で考えながら、

- ・美しいと感じる、醜いと感じる
- ・好き、嫌い

などを判断するための“ものさし”の精度を磨いていく上では不利な環境になってきていると言わざるをえません。また (特にインターネット上など) 目に触れやすい情報の多くは誰かしらの利につながるような偏った情報が多く、なおさらです。

アート作品鑑賞は、そんな錆びつきかけた私たちの判断のもとになるものさしや美意識を、リスクなく、また場所を選ばずに、研ぎ直したり磨き直したりすることができるツールになると思います (もちろん、そのアート作品鑑賞は評論家や著名人の解説に頼るのではなく、できれば現物をじっくり時間をかけて観て、自分で考えるという基本を守ることが前提の話ではありますが……)。

外から拝借してきた視点や価値観ではなく、いざというときに自分で考え判断、決定できる胆力を持った人が、これからのVUCA時代ともいえるべき、複雑で曖昧で予測不能な時代に力を発揮していくのではないのでしょうか。

◀美術や音楽など美しさを鑑賞するときに眼窩前頭皮質の活動が高まり、また逆に醜さを感じる時には運動を司る前頭葉にある領域の活動が高まる

8 対話型アート鑑賞について

医療現場でのアートの可能性が少しは伝わったでしょうか。ただ人間は継続ということが苦手なもの。「毎週1枚絵画をみる!」「美術館にいく!」と目標を立てても1年後に当初の目標を達成できている人はほんの一握りでしょう。そこで継続するためのヒントにもなりうる鑑賞メソッド、対話型アート鑑賞をご紹介します。

7) 川畑秀明：脳は美をどう感じるか—アートの脳科学。筑摩書房、2012。

8) 川畑秀明：認知神経科学。2011;13(1):84-8。

対話型アート鑑賞は、作品についての情報や解釈を専門家や教師が一方向的に伝えるのではなく、鑑賞者が自分自身の思いを尊重し、グループでの対話を通して作品を味わっていく鑑賞法です。1980年代にニューヨーク近代美術館 (MOMA) で教育部長を務めていたフィリップ・ヤノウイン氏と、認知心理学者のアビゲイル・ハウゼン氏らの研究チームによって開発された鑑賞教育プログラム、ヴィジュアル・シンキング・ストラテジー (VTS) が大本とされています。

VTSは日本では1991年以降、現・京都芸術大学(京都造形芸術大学から改名)の福のり子氏らによって美術館を中心に紹介されました。現在は日本に合わせた形で独自の進化・変化を遂げており、鑑賞スタイルや目標とする獲得スキルなどが若干異なる様々な流派が国内に存在しています。開発当初は小児を対象に作成されたプログラムだったと言われていますが、観察力や論理的思考、日本では学ぶ機会の少ないとされる批判的思考(クリティカル・シンキング)、コミュニケーション方法など総合的な能力育成につながるものとして注目され、大学や社会人教育等にも応用されています。

文部科学省の小中高校の学習指導要綱改訂(2020年度)にて、これまでの反省をふまえ、授業をより「主体的」で「対話的」なものとするように記述されていますが、具体的な手段は提示されていません。

筆者は書籍をきっかけに“対話型鑑賞”の存在を知り、日本への導入の先駆けでもある福のり子氏がセンター長を務める京都芸術大学アート・コミュニケーション研究センターが開催するセミナーで、対話型鑑賞を体験することになりました。そして、対話型鑑賞は「主体的」で「対話的」な授業を正に体現した教育方法であると感動しました。同センターとはセミナー終了後も連絡を取りアドバイスをいただきながら、医学部生をはじめとした医療従事者に必要な能力等を考慮しつつプログラムを新たに構築し、現在対象の拡大や指導者の輪を広げています。

◀対話型アート鑑賞では、鑑賞者が自分自身の思いを尊重し、グループでの対話を通して作品を味わっていく

9 なぜ対話型か？ 一人では生まれないそのメリットは？

美術作品は、一人でゆっくりと黙って作品を観ていくこともできます。一人でアート作品を観ることを否定するわけではありません。現実にはむしろ人の声を一度シャットアウトして、自分で観てじっくり考えるフェイズこそ不可逆的な、価値のある時間とも言えると思います。しかし、一人でこれまであまり親しみのなかった行為を習慣化することは思いのほか難題だと思います。いかにアート鑑賞が“自分のタメになる”という大義名分があっても、一人きりで継続し習慣化するのは大変なことでしょう。

また、最近ではCOVID-19の影響が、世界の美術館のご厚意で、相当な数のアート作品をスマートフォンやタブレットの中で楽しむことができるようになりました。た

だ、「数限りなくある作品を自由にみていい」というのは贅沢のようで、逆にどこから足を踏み出してよいかわからない状況に陥りやすいとも言えます。

そこで「対話型アート鑑賞」の“対話”という手法自体が、それら課題の一部を解決するヒントになりそうです。

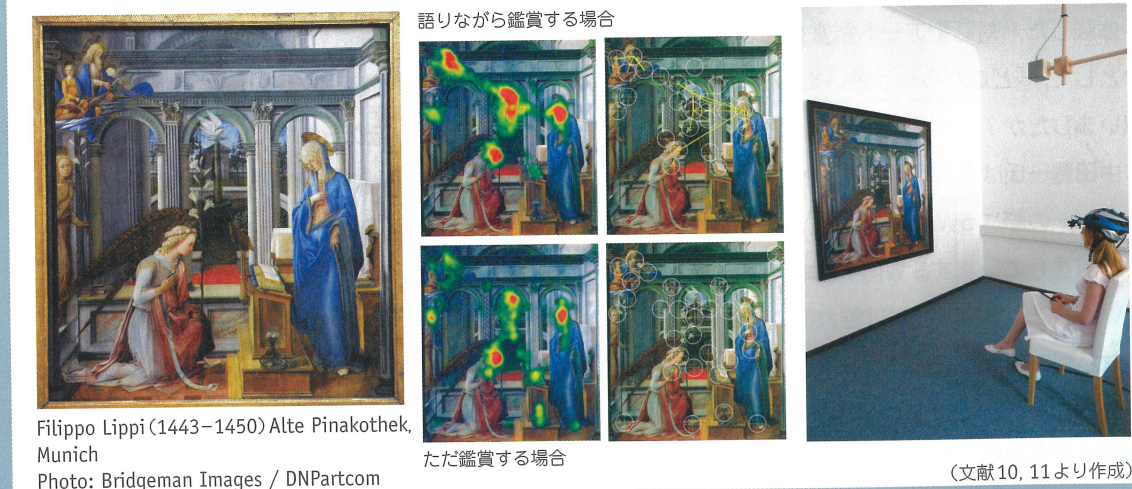
また、“対話型”という鑑賞のスタイルの持つ意義は、上野行一氏著「対話による美術鑑賞教育の日本における受容について」⁹⁾など、いろいろな研究によって明らかになってきています。

図8¹⁰⁾¹¹⁾において、中央下段の絵画の視線のパターンは、ただ絵を観ているだけの場合で、上段の絵画が、絵に対する感想について他の参加者と対話をしながら観ている場合です。他者と対話して言語化しつつ美術鑑賞するという、対話型アート鑑賞の手法によって、絵画に表現されている「もの」や「こと」を具体的に結びつけながら見ることができるようになると考えられています。また、5章でも述べたように、自分以外のひととディスカッションすることにより、まったく同じ作品を観ているにもかかわらず、個々によって解釈や引き起こされた感情が非常に多彩であることを通して、様々な価値観に触れることもできます。

できれば同僚や友人、家族などと対話しながら作品を鑑賞すると、よりこの手法の特徴が実感できるのではないかと思います。

◀同僚や友人、家族などと対話しながら作品を鑑賞すると、よりこの手法の特徴が実感できる

図8 「語りながら鑑賞している」ときと、「語らずにただ鑑賞している」ときの視線の違い



Filippo Lippi (1443-1450) Alte Pinakothek, Munich
Photo: Bridgeman Images / DNPartcom

(文献10, 11より作成)

9) 上野行一：帝京科学大紀. 2012;8: 79-86.

10) 大日本印刷株式会社 DNP ミュージアムラボ、監修：日本・フィンランド発 2つのアートプロジェクト アートが私達にもたらしてくれるもの 報告書. 2018.

[https://www.museumlab.jp/ateneum/archive/pdf/20180126ateneum_dnp_seminar_jp.pdf]

11) Klein C: PLoS One. 2014;9(12):e102439.

10 どこからそう思いましたか？—ファシリテーション基本の「き」

対話型アート鑑賞はもともと美術鑑賞の一手法として生み出されていますが、実は他分野へも応用され、様々な形で取り組みが行われています。鈴木有紀氏の著作『教えない授業』¹²⁾では、愛媛県美術館の先導による国語、社会、算数、理科、さらには体育に至るまで、様々な教科で対話型アート鑑賞を応用した取り組みとその反響が詳細に報告されています。

その授業の特徴は本の題名どおり、先生が「教えない」ことです。その代わりに生徒に多くの問いを投げかけます。「自由に感想を話してください」と言われても私たちは意外と発言はできないものですが、「見つけたこと」「気づいたこと」「考えたこと」を話してください、という具体的な問いだったらどうでしょう。対話型のメソッドでの授業は「私は○○」「僕は□□」と挙手が止まらないといえます。私が考えるに、対話の場を成立・維持するために、生徒の平等な立場や、発言の安全性・自由性を保とうとしていることがその鍵なのではないかと考えています。

対話型アート鑑賞は、グループでディスカッションを行いながら鑑賞していくことに最大の特徴があるのですが、その中の重要な先導役がファシリテーターです。鑑賞の進行役を担い、メンバーに様々な「問いかけ」をし、対話しながら発言しやすい場をつくり、豊かな気づきや意味形成を導いていきます。

筆者が、京都芸術大学アート・コミュニケーション研究センターの先生方から教わり体験した、対話型アート鑑賞を行う際の重要なファシリテーターから鑑賞者への問いとして、「どこからそう思いましたか？」というものがあります。「なぜ(理由)」そう思いましたか？ではなく「どこ(根拠)から」という表現を使用しているのがミソです。

中田豊一氏は著書「対話型ファシリテーションの手ほどき」¹³⁾の中で、他人へのインタビューの際に5W1Hのうち「Why(なぜ)」や「How(どう)」を使用すべきではないと明言しています。Whyには回答者の感情や解釈、意見が入る“選択する”余地が大いにあり、事実からかけ離れていくことも少なくないからです。

対話型アート鑑賞のファシリテーションでもまったく同様のことが言えるのではないのでしょうか。「どこから」と問うことで、自分の発言の根拠を、作品の中の具体的な“事実”から自然と探し出して、言語化するように導くことができます。また、考える過程でその“事実”と自分の“解釈”は区別すべきものであることも自ずから理解するでしょう。

これは医療現場での土台となる問診にも言えることではないのでしょうか。もちろん、「原因は○○に違いない」という従来の鑑別方法による解釈や患者さんの解釈を頭ごなし

◀対話型アート鑑賞の重要な先導役がファシリテーター

◀「どこから」と問うことで、自分の発言の根拠を、作品の中の具体的な“事実”から自然と探し出して、言語化するように導くことができる

12) 鈴木有紀：教えない授業。英治出版、2019。

13) 中田豊一：対話型ファシリテーションの手ほどき。ムラのミライ、2015。

に否定するのは避けられないといけませんが、こと診断がついていない場合など、診療の方向性を決めなければいけない場合は、まずは客観的な“事実”をもれなく積み重ね、それをもとに解決すべき課題を設定することが第一歩目ではないかと考えられます。

ファシリテーターが「どこからそう思いましたか？」と問うことで、ひとつの話題をメンバー皆で共有することにも繋がるため、発言しやすい空気も生まれていきます。続く発言から同時に同じ“事実”からでも複数の解釈が生まれうる、ということも実感することになるでしょう。“「絵の○○から」(根拠)”と“「△△と思った」(解釈)”をセットで話す習慣がつくことで、論理的に考える習慣の発育が期待できます。診療を支える科学的な基本姿勢を培っていくことができるのです。

◀根拠と解釈をセットで話す習慣がつくことで、論理的に考える習慣の発育が期待できる

11 実践！対話型アート鑑賞の実際の進め方

それでは、実際に対話型アート鑑賞を行ってみましょう。

対話することに意味があるので、できるだけ自分以外の人とディスカッションしながら行うのが一番いいです。難しく考えなくても、同僚や友人、家族と気軽に行ってもかまいません。もし一人で行う場合はなるべく客観的に自分に問いを投げかけてみてください。

◀できるだけ自分以外のひととディスカッションしながら行うのがいい。もし一人で行う場合はなるべく客観的に自分に問いを投げかけてみる

さて、自分がファシリテーターになったとしましょう。対話型アート鑑賞での実際の進め方の例として、筆者が何より重要と考えているのは下記のようなことです。

- ・建前でない、自由な発言が可能という雰囲気をつくる。
- ・正解、不正解、正しい、間違っているという白黒はつきりつけた考え方ではなく、あくまでいろいろな気づきや解釈が生まれる、ということを感じ楽しんでもらう。
- ・どんな発言が出ても批判、非難はしない(ネガティブな感情の出現自体を拒否する、ということではありません)。あくまで発言の根拠や意図を解きほぐしていく、読み解いていくというスタンスで話す。
- ・参加者の発言をじっと待つ(重要!!)。

(1) 題材選び

まず、題材選びです。特に制限はなく、どんな作品でも題材になると思いますが、自分でじっくり時間をかけて鑑賞した経験のある作品がより適していると思います。

幸い前述の通り、最近は多くの作品をインターネットで閲覧することが可能になりました。たとえば、Google Arts & Cultureは、世界各国2000以上の有名美術館や博物館のコレクションを鑑賞したり、館内バーチャルツアーができるオンラインサービスで

す。他にも参考になりそうなホームページがいくつもありますので、まずは、多くの作品をざっと流し見しながらピンときた作品をじっくり鑑賞するのはいかがでしょうか。

■おすすめサイト

・Google Arts & Culture

[<https://artsandculture.google.com/partner?hl=ja>]

・ジャパンサーチ

[<https://jpsearch.go.jp/>]

・「無料で使用できる素材リンク集 絵画・写真etc…」(筆者のHPより)

[<https://note.com/miruikitekanjite/n/n2131e1d707b8>]



(2) 対話型アート鑑賞の質問項目

具体的にどんな問いを投げかければいいのでしょうか？

それでは本稿の一番初めの絵画に戻ってみましょう。

図9



(Winslow Homer, 1885)

対話型アート鑑賞の元になっているVTSの基本質問は次の3つとされています。

- ① この作品の中で何が起きているのでしょうか。
- ② この作品のどこからそういうふうにしたのですか。
- ③ ほかにもっと発見がありますか。

ただ実際の鑑賞者の発言を聞いてみると、①の質問に対する回答としては、

・海。小舟。それを漕ぐ帽子をかぶった人 (ほぼ事実)

・荒波に揉まれながら、釣り人が帰路を急いでいる (解釈、意見、想像)、といった感じで、“ほぼ事実”と“解釈や意見”など観点の違う発言が混在することが多いです。

筆者は特に対話型アート鑑賞を医療者のスキルアップという目標のために使用している観点から、前述のように“事実”と“解釈”を区別しながら考えるのは重要な、外せないエッセンスとして考えています。

まず一人で絵を眺めるときから事実と解釈を区別しながら鑑賞することで、本番で参加者から出る発言の予想がつき、話を広げやすくなります。

私が以前ファシリテーターとしてオンラインの対話型アート鑑賞会を企画した際には、鑑賞の際の質問項目に関して試行錯誤した結果、下記のような手順と質問項目で予習を行うように行き着きました(表2)。質問項目の答え(自分の思ったこと)は、できれば頭で考えるだけでなく、デジタルでも紙でもいいので文章化することが重要です。文字にしていないと美術書などの解説文(専門家の意見)をみたとき、「ああ、そんな気がしてた」となって、最初に自分が思ったことをうまく振り返れないことも多いからです。

(3) 実際に鑑賞してみる一手順と解説

表2についてももう少し詳しく解説します。

表2 対話型アート鑑賞の手順と質問項目(森永案)

1 絵を10秒だけみて感じたこと、気づいたことは何か？
2 絵に描かれていることは？ ① 描かれている事実は？(客観的事実: objective fact) ② 上記から絵の中で何が起きているか物語を作成せよ。 ③ 上記からこの後に何が起これと想像できるか？
3 どのような感情、感覚(あれば教訓)が浮かんだか？
4 まとめ。感性的・分析的観察、解釈を双方向からすり合わせ。

【手順1】 絵を10秒提示→1分で一言サマリーを示してもらおう。(感性的・直感的観察)

あまり分析的に考えようと意識せず、短時間でどのような感情を持ったか、解釈できたかをメモしてもらおう(怖い!とか悲惨!とかでもよい)。メモは後の工程で使用するのとっておく。

【手順2】 絵に描かれていることを突き止める。

① 描かれている事実は？(客観的事実: objective fact)

絵の中の事実を挙げる。ただし絵の中の事象も白黒はっきりと表現できるとは限らない。あくまで曖昧な情報を扱っているという自覚を促す。ブレインストーミングのように「他には?」と続けて質問し、まずは数多く、漏れなく、際限なく挙げていくのが目標。

② 描かれている事実をもとに絵の中で何が起きているか物語を作成してもらおう。

③ この後に何が起これと想像できるか?(解釈・意見、物語の創造/想像)

①で挙げた客観的事実を統合し、物語を紡いでいく。①の事実と解釈を別物として

◀自分の思ったことは、頭で考えるだけでなく、デジタルでも紙でもいいので文章化することが重要

◀①絵を10秒提示→1分で一言サマリーを示してもらおう
②絵に描かれていることを突き止める
③自分の考えを昇華させる
④感性的・分析的観察、解釈を双方向からすり合わせ

思考することが重要。質問しながらその解釈に至った理由を問いかける。①の事実をもとにしても、絵画の観方(ものの見方)には多様性があるという真理も体感できる。**〔手順3〕**どのような感情、感覚(あれば教訓)が浮かぶ? 自分の考えを昇華させる。

こちらに関しても手順2-①の事実とはわけて思考してもらう。十分に深められない場合は、事実の拾い出しが十分でない可能性もあるため、手順2-①の事実の列挙に適宜戻ってもよい。

〔手順4〕まとめ。感性的・分析的観察、解釈を双方向からすり合わせ。

手順1の1stインプレッションで感じたことと、手順2と3の分析的鑑賞過程で得た結論の相違点を評価する。

(4) 対話型アート鑑賞の実際の進行

対話型アート鑑賞は、実際に自分がじっくり時間をかけて鑑賞した絵を題材にファシリテーションしていくわけですが、あくまで一例としてどのような進行になるのかをご紹介します。

ファシリテーター(以下ファシリ) : まずは誰とも話さず、一人でこの絵を隅々までじっくり観てみましょう。2分間です。それではどうぞ。

(2分後)

ファシリ : それでは観足りない人ももしかしたらいるかもしれませんが、いったんここで時間となります。この絵に描かれていることを、何でもよいのですが、言ってみてください。最初に手を挙げてくださる方はいますか?

参加者一同 : ……。

ファシリ : というと最初の発言はけっこう難しいかもしれません。どんな当たり前のことでもかまいません。この絵を知らない人に伝えていく想定で話してください。

Aさん : それでは……男性が一人、船の上に乗っている絵でしょうか。

ファシリ : ありがとうございます! 最初は勇気がいったと思います。男性……というとどこからそう思いましたか?

Aさん : (10秒ほど改めて絵を観て考える。その間ファシリは無言で待つ) そうですね、ヒゲが生えているように見えますし、服装もどこか軍服というかそのような感じがします。

ファシリ : そうですね。Aさんは、顔にあるヒゲや服装から男性である、と推測してくれました。皆さんはどうでしょう? 男性に見える、という解釈でよろしいでしょうか?

一同 : (うなずく)

ファシリ : ありがとうございます。今のような感じでぜひどんどんお願いします。

Bさん : 船の上に魚が乗っています。釣り上げたのだと思います。あ、そうすると

男性は漁師かもしれない。

ファシリ : 素晴らしい気づきをありがとうございます。“船の手前にある魚”という情報を男性と結びつけて男性の職業を推測してくれたのですね。ちなみにどれくらいの大きさのお魚でしょう?

Bさん : え、ちょっとわかりません。

ファシリ : はい、確かに正確な大きさなどをこの絵から算出することは難しいと思います。ただ、たとえば他のものと比べることである程度の“範囲”で推測はできるかもしれません。いかがでしょうか?

Cさん : はい、えっと船の人はそうですね、170cmくらいでしょうか。そうすると魚は……、1mを超える大きさかもしれません。

ファシリ : 素晴らしいですね! 最初の「魚」という情報から、人物と対比することで具体的な大きさの情報まで推理することができました。お魚、かなり大きそうですね。はい、それでは今と同じ部分でも、絵の他の部分でも、他に気づいたことがある人はいますか?

Dさん : 船の上、向かって奥のほうに錨のようなものが見えます。えっとこれが船の上にあるということは、この船は停泊していない、どちらかに進んでいるんだと思います。

ファシリ : はい! 錨に見えますね。さらにそこから論理的に船の動きまで考えていただきました。ちなみに船はどちらの方向に進んでそうですか?

Dさん : 絵を向かって奥の方向ですかね? 手漕ぎボートに乗っているとすると。

Cさん : (挙手) 私も奥に進もうとしているように見えますが……私の解釈ですが手の筋肉に緊張が走っていないようにも見えるので、今は漕ぐのをやめている、手を休めているようにも見えます。

ファシリ : Dさんありがとうございます。進行方向については皆さん異論はないでしょうか? そしてCさんもありがとうございます。事実と解釈を区別しながら話されているのがはっきりわかりますし、素晴らしい気づきだと思います。

絵画一覧

図1, 9 ウィンスロー・ホーマー(Winslow Homer), The Fog Warning, 1885年。

図4 エドゥアール・マネ(Édouard Manet), フォリー・ベルジェールのバー(A Bar at the Folies-Bergère), 1882年。

図5 ヴィルヘルム・ベンズ(Wilhelm Bendz), Swelling in the Region of the Patella, 1829年。

図6, 7 トニー・マテリ(Tony Matelli), Sleepwalker, 2014年。

図8 フィリッポ・リッピ(Fra Filippo Lippi), 受胎告知(the Annunciation), 1440年代。